

絵としての文章

漫画家

安野モヨコ

私は常々文章も絵であると思って本を読んでいる。
それはどういうことかと言うと見開き一ページの文章や記事を読むときに文章の意味、内容などは別にページを画像として見るということ。一枚の絵、もしくは大判の壁紙に印刷された模様だと思つてページを見るのである。漫画家という職業的なクセなのかもしれないけれどこれが結構面白い。

今、試しにやってみていただきたい。ページから少し目を離して全体を見ると漢字の割合によつて全体的に黒く見えるページと中くらいのバランスのグレーのページ。そして余白やひらがなが多い白っぽいページなどがある。他の文章もそうやって見ていくと、書く人が変わるとページの印象が変わることに気がつくだろう。日本語の意味をわからない外国人や宇宙の人から見たら文字は描線を構成するパーツにすぎない。その感覚で見れば文字は意味をなさない模様と捉えることもできる。

ひらがなが多い文章はパツと見たときに原つぱに放たれた動物が走つて散つていくようだし、漢字とひらがながちやうど同じくらいのバランスの文章の場合はうごめく人々を上から見ているような感覚に陥る。漢字が多めの文章はぎつしりと隙間なくビルの立ち並ぶ大都会のような印象を受ける。

絵、として見ていく中でももうひとつ踏み込み今度は多少の日本語の知識があることをベースに見てみよう。文字は描線を構成するパーツでもあり、漢字や熟語は意味による色合いを構成する絵の具でもある。

からである。

印象ということという文字そのもののデザイン性とは別に一瞬でわかる言葉の意味や文字の印象というのも、ページそのもののヴィジュアルに影響する。

例えば「**絢爛**」や「**瀟洒**」という二文字から受ける意味的印象と映像的印象は一致していてページの中にあるだけで「繊細で美しい何かが存在する空間」を感じることが出来る。ただしそれは全体の文脈や他に使用されている文字とのバランスが非常に重要で、もしも文脈の中に「居

改行や漢字の使い方にクセのある人はパツと見てその人の書いたものとわかる時がある。
漢字の量が同じくらいのもうでもページを見れば谷崎潤一郎なのか岡本綺堂なのかはなんとなくわかる。

使用する漢字の種類が違うから、漢字によつて生じる「黒く見える部分」の密度に差がある。

私の印象では谷崎の方が若干黒い。入り組んだ画数の多い漢字を好んで使うのもあるがその熟語の意味自体が全体に影を落としている部分も多い。

漢字だけではない。ひらがなもカタカナも使用する語尾やどの漢字をひらがなに開くか、なども画面構成には大きく影響してくる。

多用する接続詞や形容詞がどのような言葉かによつて画面上に多く現れるひらがなの種類も変わってくる。

語尾を丁寧にすれば必然的に「ま」「す」「で」などが割合として多くなる。

「す」や「で」は文字の画数が少ないの

酒屋」や「するめ」などが同時に存在した場合「**熱爛**」「**鰭酒**」と書いてあるような錯覚に陥る。

文章を映像的に見るということについて思いつくままにまとまりもなく書いてきたが日本語における文字の印象や画面の印象を絵として「見る」ことの面白さが伝わればと思う。

最後になるけれど文章において最も重要で大切なことは当然のことながら内容である。ものすごく当たり前のことを偉そうに言つて申し訳ないが、映像的に見て美しくても文章がつまらなければどうしようもない。文章が面白くても内容がなければそれは全くどうにもならない。

一番よろしいのは文章が面白く、内容が濃厚でありながら画面的にも美しいこととでありそういう文章を書ける人がこれからどんどん増えていくと良いなと願っている。

そう願う私自身ももう少しどうにかしなければならぬと日々精進するばかりである。

安野モヨコ
あんの

1971年、東京都生まれ。『ハッピー・マニア』で大ブレイク後、『ジェリー・ビーンズ』『花とみつばち』『さくらん』『働きマン』など、数多くのヒット作を生み続けている。2005年、『シュガシュガルー』で第29回講談社漫画賞を受賞。絵師として個展を開き、紙版画集『篇と鸚鵡』を刊行。表現活動の幅をさらに広げている。現在、『AERA』で『オチビサン』、『FEEL YOUNG』で『鼻下長紳士回顧録』を連載中。主なエッセイに、『くいん』（文藝春秋）、『美人画報』（講談社）など。

